

青年期の自己愛傾向の高まりに影響する要因の検討

——学童期の特別な地位の獲得とその喪失——

河上純子*

Factors to Increase Narcissistic Tendency in Adolescence :

Acquisition and Loss of Special Position in Later Childhood

KAWAKAMI Junko

abstract

The purpose of this research is to examine the relation between the narcissism tendency in late adolescence and special positions acquired in the early elementary school years. In addition, it examines whether the loss of special positions during one's early adolescence will be the factor to change one's narcissistic personality type. 169 undergraduate students (38 male and 131 female, average age 19.88 years) participated to this study. The result of t-tests and ANOVAs indicated that a) gender difference existed in the relation between narcissism tendency in late adolescence and the influence of experienced special position in late childhood, and b) female who received the special treatment from their teacher in their late childhood, and lost it in early adolescence might show hypervigilant narcissistic tendency in their late adolescence.

Keywords : adolescence, two types of narcissism, personality formation, retrospective study, special position

1. 問題

1.1. はじめに

自分自身を愛するという事は、人が身体的・心理的に健康に生きていくうえで重要な感情である。自分を大切に思うがゆえに自負心や自尊心が芽生え、目標を達成しようという精神的なエネルギーが生み出される(中島, 1998)。そもそも、自己愛とは narcissism の日本語訳であり、一般的なイメージとして自己に没頭する病的なイメージを伴うものである。しかし Fromm (1956 懸田訳, 1959) は、自己愛とは誰にでも認められる心性であり、人が生きていくために必要なものであると述べている。実際、適応の指標として一般的に用いられる自尊心の高さと、自己愛を構成する一部の因子は正の相関関係を示しており (Emmons, 1984; Rhodewalt & Morf, 1995; 小塩, 1997)、精神的な健康を維持することと自己愛には何らかの関連が存在していることが予測される。さらに社会的な適応に関しても、自己愛傾向の高い人物が友人から好まれるといった特徴が見出されており (小塩, 1998)、自己愛傾向の高さと心理的・社会的適応には関連があることが示唆されている。しかし、過度に自分自身を大切に扱うことは、様々な弊害を生じさせる原因でもある。その例として、自己中心的な振る舞いによって周囲に迷惑をかける人々の存在や他者との交流からの傷つきを恐れ、対人関係から引きこもる若者の状態に注目が集まっ

キーワード：青年期、二種類の自己愛、人格形成、回顧的研究、特別な地位

*平成18年度生 人間発達科学専攻

ているが、現代の大学生の特徴を捉えるとき、自己愛の問題が最適であろうとする指摘もある（生地, 1999）。

1.2. 自己愛の形成過程

自己愛は健康的な側面を持ちつつも、時に自己愛性人格障害（APA, 1980）に代表されるように、不適応的な影響を及ぼす可能性も持ち合わせている。このような特徴を持つ自己愛は、どのようなプロセスを経て形成、維持されるのだろうか。自己愛性人格障害者の治療を行っていた Kohut（1971 水野・笠原監訳, 1994）は、自己愛は乳幼児期に高い状態にあり、乳幼児期の重要な他者とのかかわりによって調節され、健康的な自己愛が形成されると述べている。

乳幼児期に自己愛が調節された後に再び自己愛が高まる時期として、両親からの心理的自立を果たす青年期があげられる。青年期の自己愛の高まりには、思春期の自己意識の発達や、誇大的な自己愛を助長するもしくは誇大的な自己を想像するような経験が増すこと（大淵, 2003）、そしてそれまでに確立されていた世界から独り立ちし、社会における自己の存在価値を見出そうという気持ちの高まりが影響を与えていると言われており（中島, 1998）、多くの研究者が青年期の自己愛傾向についての研究を行っている（e.g., Emmons, 1984；相良, 2006；中山・中谷, 2006；小塩, 1997, 1998, 2004）。この時期に起こる自己愛の高まりは、多くの場合一過性のものであり、自己の確立が進むにつれて再び適当な状態に治まるとされている。自己愛の形成過程と青年期の自己愛に関する研究として、宮下（1991）は両親の養育態度が青年の自己愛傾向を形成する一因と考え、大学生を対象として調査を行っている。その結果、男子では父親の支配・介入的養育態度が自己愛を増長させる要因となる可能性があることが示された。また女子においては母親の情緒的支持・受容的養育態度が自己愛を抑制させる要因となり、母親の情緒不安定と父親の肯定的な養育態度が自己愛を増長させる要因となるといった関連を示している。

しかし個人の自己愛を満たすような現代の日本社会（小此木, 1981）では、幻想的な自己愛から抜け出せられない青少年の増加が指摘され（町沢, 1998）、青年期の自己愛の高まりを単なる成長の一環として捉えることが難しい人々の存在が見えてきている。対人恐怖症状を示す人々の一部に自己愛が関連していることを指摘する鍋田（1997）は、その治療の中で学童期の自分の人生をすばらしいものであったと語り、思春期・青年期にさしかかったころから対人恐怖症状を訴えていることに注目している。鍋田（1997）は自己愛の問題を根底に抱える対人恐怖症者の多くが、乳幼児期に家庭の中で適切に自己が育成されなかった人々であり、そのような家庭的背景を持つ彼らが小学校という社会的集団でも過剰に適応して特別な地位を獲得することは、それまで増長されてきた万能的な自己愛が修正される機会の更なる先延ばしであり、幻想的な万能感が増すと考えた。彼らが対人恐怖症状を発現させることは、思春期の客観性や自己意識の発達に伴って生じる幻想的な万能感の崩壊の影響である可能性が指摘されている。

自己愛の発達や病理についての研究は臨床実践から得られた理論的な研究が中心で、実証的な研究はほとんどなされていない。そこで、本研究では自己愛傾向を発達させる要因として学童期の特別な地位の獲得（鍋田, 1997）に着目し、地位の獲得が青年期の自己愛傾向とどのような関連を示すのかについて検討を行うこととする。さらに、上記の問題に加えて、宮下（1991）の結果からは、自己愛の形成における重要他者の影響を示唆するとともに、その過程において性差が存在することが示唆されている。自己愛傾向を構成する自己誇大感や自己主張性など、Gabbard（1994 館監訳, 1997）が無関心型自己愛人格と呼んだ、誇大的な自己愛が表面に出る傾向は男性の得点が高くなることが指摘されており（小塩, 1998）、自己愛傾向についての様々な研究の中で、自己愛傾向の性差が取り上げられることも多い（e.g., 佐方, 1986, 1987；角田, 1998）。しかしその一方で、有意な性差が示されない研究も多数報告されている（e.g., 大石, 1987；大石・福田・篠置, 1987）。現在のところ、自己愛傾向に性差が存在するのか、また自己愛傾向が形成される過程において性差が存在するのかといった議論への明確な結論は出していない。そのため、本研究においても学童期の地位の獲得が男女によって異なる影響を及ぼすのかを検討する。

1-3. 自己愛の2つの側面

ところで、冒頭で自己愛に何らかの問題を抱える人々を例にあげたが、その特徴はむしろ正反対の表現形を示している。自己愛という同一の根源に端を発するものの、表現形が異なるという現象に注目が集まったのは、

1970年代に Kohut (1971) と Kernberg (1975) を中心にして起こった臨床像の異なる自己愛人格者たちの議論が元になっている。この議論を受けて、自己愛人格の2つの側面が様々にあげられることとなったが、Gabbard (1994) は周囲の人々に関心を向けない自己愛人格の人々を無関心型自己愛人格 (The oblivious narcissist)、周囲の反応を過剰に気にかけるタイプの人々を過剰警戒型自己愛人格 (The hypervigilant narcissist) と呼んだ。さらにこの両者についての議論の中でも、我が国では日本人によく見られる対人恐怖症と後者の特徴が類似していることに注目が集まっている (e.g., 牛島, 1995, 鍋田, 1997, 岡野, 1998, 清水・海塚, 2002, 2004)。岡野 (1998) によれば、両者ははっきりと区別されるものではなく、恥や罪悪感といった感情体験によって円環的に転換するものであるとされている。過剰警戒型自己愛人格のように一見すると他者との関係を重視しているように見える自己愛人格について、牛島 (1995) は他者から推されることで世に名前を出すような自己愛の満ち方との関連を指摘し、相互依存的な社会で自己愛を満足させる方法でもあると指摘した。荒木 (2004) は彼らが一見すると他人指向型のように見えるものの、自己愛型の生き方を持つ「同調仮面型」の人々であると指摘し、両者ともに社会文化的背景の要因を挙げている。

本研究では青年期の自己愛傾向の様相について検討し、合わせて自己愛傾向を発達させる要因と自己愛性人格障害の表現形が二極化される要因として、鍋田 (1997) の述べる思春期まで延長された自己愛の傷つきの影響に焦点を当てて検討を行う。つまり、学童期に他者と比較して特別な地位を獲得した者はそうでない者よりも無関心型自己愛傾向が高くなるだろう、またその後思春期にその地位を失った者は、無関心型自己愛傾向が調節されるものの、同時に過剰警戒型自己愛人格傾向が高まるだろうという2つの仮説の検証を行う。

2. 方法

2.1. 調査対象者と手続き

関東近郊の4年制大学学部生で25歳以下である567名(男性183名、女性383名)に対して無記名での質問紙調査を実施した。平均年齢は19.95歳 ($SD=1.46$, $Range=18\sim 25$) であった。調査は2005年6月下旬～2006年7月上旬に行い、主に授業の最後に配布しその場で回収を行う形式を取った。回収された567名のうち、回答に不備のあるもの、不適当な回答を行ったものを除いた537名(男性171名、女性366名)について以下の分析を行った。

特別な地位の体験の質問項目は上記のうち2006年6月～7月に行った対象者169名(男性38名、女性131名)、平均年齢=19.88歳 ($SD = 1.58$, $Range = 18 \sim 23$) にのみ回答を依頼した。

2.2. 質問項目

自己愛傾向尺度 自己愛傾向の測定には Ruskin & Hall (1979) による Narcissistic Personality Inventory (NPI) を基にして作成された質問紙が多く用いられている。しかしこれは DSM-III (APA, 1980 高橋・花田・藤巻訳, 1982) に準拠して作成されたものであり、Gabbard (1994) の述べる無関心型自己愛人格の特徴が大部分を占めている。本研究においては自己愛の2つの側面を検討するという目的から、過剰警戒型自己愛人格の特徴についての項目が含まれている相澤 (2002) の自己愛人格項目群を使用した。

回答には5件法 (1=当てはまらない～5=当てはまる) を用いて回答者に自己評定を行わせた。質問項目は無関心型自己愛人格的な特徴を持つ21項目と、過剰警戒型自己愛人格の特徴をもつ27項目からなる48項目で、妥当性の検討として YG 性格検査の各下位尺度との相関を確認している。なお、相澤 (2002) は無関心型自己愛人格的な特徴を誇大特性、過敏型自己愛人格的な特徴を過敏特性として呼称しているため、本研究にあたっても以下同様に記すこととする。質問紙の各因子構造は、自己誇大感、賞賛願望、権威的操作、自己愛的憤怒、対人過敏、対人消極性、自己萎縮感の7因子に分かれ、より高次の次元において誇大自己 (自己誇大感、賞賛願望) と萎縮自己 (対人過敏、対人消極性、自己萎縮感)、自己愛的傷つきやすさ (権威的操作、自己愛的憤怒、対人過敏) の3つの因子でまとめられることが報告されている (相澤, 2002)。

各項目の内容は確証的因子分析における因子負荷量や Cronbach の信頼性係数とあわせて表1に示した。確証的因子分析における適合度はそれぞれ $AGFI = .824$, $RMSEA = .055$, $CFI = .852$ となり、相澤 (2002) に示さ

表 1. 自己愛的人格項目群 (相澤,2002) の確証的因子分析による因子負荷量 (N=537)

項目	I	II	III	IV	V	VI	VII
a20 私にはもって生まれたすばらしい才能がある	.69						
a12 自分の思想や感性にはかなり自信がある	.69						
a10 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ	.68						
a31 他の人とは違って、自分はたくいまれな存在である	.68						
a03 自分自身では、要領もいいし賢明さも備えていると思う	.63						
a18 自分はきっと将来成功するのではないかと思う	.62						
a15 自分が偉大な人間になっているような空想をする	.56						
a08 自分の体を人に自慢したい	.55						
a02 私は今までにたくいまれな経験を積んできた	.48						
a27 人の注目を浴びるのが好きだ		.77					
a25 ここぞという時には大胆に自己アピールをしたい		.65					
a04 人前で発表したり演技をしたりするのが得意だ		.64					
a21 人から賞賛されたいと言う気持ちが強い		.60					
a01 人の話に耳を傾けるよりも自分のことをもっと話したい	.31						
b18 人といっても自分だけが取り残されたような気持ちになる			.75				
b21 周囲の視線が気になって、動作がごちこちなくなる			.74				
b11 周りの人の視線が気になり落ち着かない			.73				
b22 人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる			.71				
b26 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる			.69				
b10 大勢の前にいると、自分が圧倒されてしまう			.68				
b20 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる			.67				
b05 失敗するのではないかといつも不安になる			.67				
b24 自分に自信がない			.67				
b08 何かにつけ、他人の方が上手くやっているように感じる			.65				
b15 少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する			.65				
b17 自分が他人にどのような印象を与えているのか、とても気になる			.63				
b16 先のことをよくよ考えすぎる			.60				
b02 無理して人に合わせようとして、窮屈な思いをする				.74			
b03 知っている人を見かけても、顔を合わさないように道避ける				.73			
b06 人と心から打ち解けて付き合いができない				.72			
b23 人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず、人を避けてしまう				.71			
b30 人と自然に付き合い合えない				.64			
b31 人と対面すると、相手を意識して緊張する				.57			
b32 人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない				.50			
b33 内気な方である				.46			
b28 引っ込み思案である					.79		
b01 気が弱い					.67		
b13 自分の意見が正しいと思っても強く主張できない					.63		
b25 決断力がない					.60		
a28 私の意見や考えに周りの人を従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのと思う						.68	
a26 人々を従わせられるような権威をもちたい						.64	
a13 自分の役に立つかどうかで友達を選ぶことは、正当なことである						.48	
a06 必要ならば罪悪感を感じることなく、人を利用することができる						.23	
b19 根気がなく何をするにも長続きしない						.10	
b12 人に軽く扱われたことが、後々腹が立って仕方がないことがある							.74
a34 人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りを抑えられなくなる							.64
a22 人から不当な評価を受けることには我慢がならない							.62
a27 対人場面でその場は何とも思わなくても、後々腹が立つことがある							.49
信頼性係数 (α)	.85	.72	.77	.86	.92	.56	.69

* 項目番号は相澤 (2002) にならう

* I = 自己誇大感、II = 賞賛願望、III = 対人過敏、IV = 対人消極性、V = 自己委縮感、VI = 権威的操作、VII = 自己愛的憤怒

れた因子構造と同様であり、妥当であることが示唆された。ただし b19 (表1参照) は確証的因子分析において有意な構造は確認できず、a06 とともに因子負荷量が低かった。本研究では相澤 (2002) の質問紙としての構造を重視し、項目の削除は行わずに各因子の項目の得点をそれぞれ合計し、以下の分析に使用した。

特別な地位の獲得 学童期・思春期の体験については鍋田 (1997) の記述や河上 (2006) より、学童期初期に特別な地位を獲得した体験についての質問項目を作成し、その有無について解答を求めた。また体験があると答えた者にも、その体験が中学生のころに体験されなくなったかどうかについて解答を求めた。

特別な地位として分類された領域は①学業・知的能力 (テストの点数がいつも 100 点ばかりだった)、②身体能力 (人よりスポーツができた)、③同年齢集団での立場 (自分は人気者だと思っていた)、④教師との関係 (先生に気に入られていた)、⑤芸術・その他の才能 (芸術的な才能があると思っていた)、⑥容姿・外見 (よく容姿を人からほめられた) である。なお鍋田 (1997) は負の特別な地位の獲得は、より重篤な自己愛の問題と対人恐怖症状に関係していると指摘しているが、自己愛の傷つきの延期に着目するため、本研究では特に正の特別な地位についての項目に限定した。

3. 結果

分析は全て SPSS for windows 12.0J を用いて行った。

3.1. 自己愛傾向の性差

それぞれの因子の合計得点をそれぞれの因子に含まれる項目の数で除し、性差の有無について t 検定を行ったところ (表2)、自己誇大感、賞賛願望、対人過敏、対人消極性、自己萎縮感の5つの因子において男女差が見られた (順番に $t(167)=3.47, p<.01, t(167)=2.25, p<.05, t(167)=-3.58, p<.01, t(167)=-2.92, p<.01, t(167)=-2.55, p<.05$)。一方で、自己愛的傷つきやすさとされた権威的操作、自己愛的憤怒においては、有意差は見られなかった (それぞれ $t(167)=1.55, n.s., t(167)=-.38, n.s.$)。また、青年期の自己愛傾向の特徴を検討するため、性別による7因子の合計得点図1に示した。

表2. 男女別自己愛的人格項目群の因子記述統計と性差

	男 ($n=38$)		女 ($n=131$)		p
	M	SD	M	SD	
自己誇大感	2.69	(.64)	2.27	(.76)	**
賞賛願望	3.10	(.65)	2.79	(.76)	*
対人過敏	2.89	(.87)	3.46	(.87)	*
対人消極性	2.73	(.80)	3.21	(.91)	**
自己萎縮感	2.95	(1.17)	3.41	(.90)	**
権威的操作	2.75	(.73)	2.54	(.77)	<i>n.s.</i>
自己愛的憤怒	3.22	(.89)	3.28	(.87)	<i>n.s.</i>

※ * $p<.05$, ** $p<.01$

男女の得点に有意な差が見られたため、以後の分析においては男女別に行うものとし、男女ごとの因子間相関係数を表3に示した。男性における権威的操作・自己愛的憤怒の2因子は、対人消極性と自己愛的憤怒との相関関係を除いて、他の因子との有意な相関が見られなかった。女性は弱いながらも有意な正の相関が権威的操作・自己愛的憤怒と自己誇大感・賞賛願望との間、権威的操作と対人消極性の間、自己愛的憤怒と対人過敏・対人消極性の間に見られた。

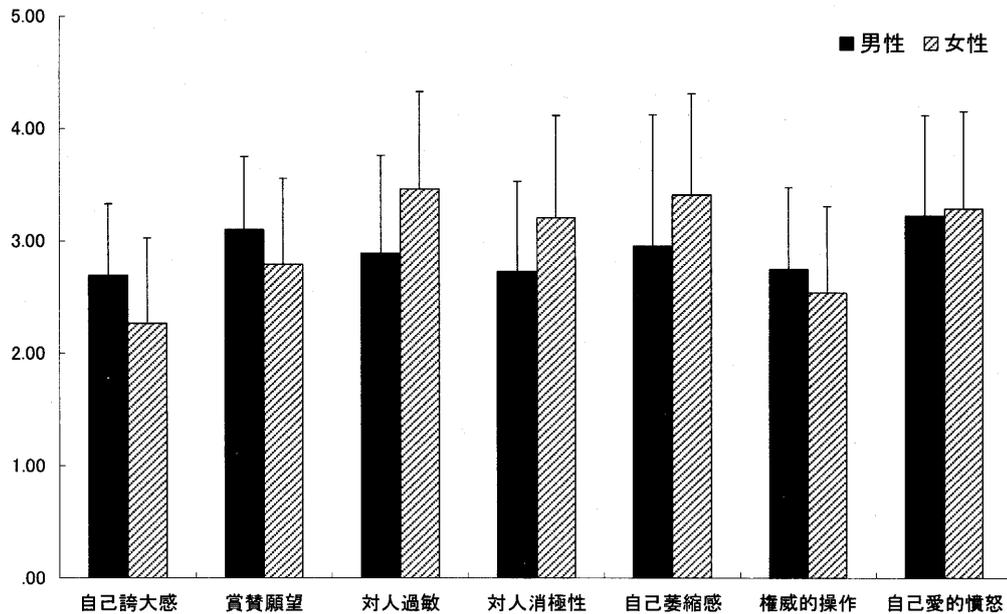


図 1. 男女別自己愛人格項目群の各因子の得点

3.2. 特別な地位と自己愛傾向との関連

対象者を①1つも特別な地位を獲得しなかった群（以下 SP なし群）、②1つ以上特別な地位を獲得した群（以下 SP 獲得群）、③特別な地位を獲得したものの1つ以上の地位を喪失した群（以下 SP 喪失群）の3つに分け、自己愛傾向の7因子の得点の高さについて3群間での比較を行った。男性についてはSPなし群の男性が1名のみであったため1名を分析から除き、SP獲得群とSP喪失群の2群間の各因子の得点を比較した。その結果対人消極性に関してのみ有意な差が検出され、SP喪失群のほうがSP獲得群よりも得点が高いことが示された。加えて自己誇大感にSP獲得群の得点が高い傾向が示された。その他の得点は統計的に有意な差は見られなかった。女性は1要因（SPなし、SP獲得、SP喪失）の分散分析によって各因子の平均得点の比較を行ったところ、自己誇大感、賞賛願望、対人過敏、自己萎縮感の4因子で3群間に有意な差が見られた（表4）。

そこで特別な地位と自己愛傾向との更に詳細な影響を検討するために、特別な地位の領域ごとの自己愛傾向への影響を検討した。それぞれの領域で上と同様にSPなし群、SP獲得群、SP喪失群の3群を作成し、自己愛の7因子の得点を従属変数として1要因の分散分析を行った。その結果、男性では身体能力と仲間との関係における自己誇大感の得点に有意傾向が示されたのみであった。両因子ともにSPなし群とSP獲得群では、SP獲得群のほうが自己誇大感が高い傾向が示された（表5）。女性は教師との関係、同年齢集団での立場、容姿・外見の3領域において有意差が見られた（表6）。

表 3. 男女別各自己愛傾向得点間の相関係数

	I	II	III	IV	V	VI	VII
I 自己誇大感		.43**	-.34*	-.42**	-.49**	.27	.06
II 賞賛願望	.62**		-.56**	-.57**	-.55**	.25	-.04
III 対人過敏	-.29**	-.24**		.81**	.72**	-.08	.55
IV 対人消極性	-.20**	-.27**	.74**		.68**	-.13	.39*
V 自己萎縮感	-.36**	-.30**	.81**	.81**		-.27	.28
VI 権威的操作	.37**	.25**	.08	.28**	-.01		.24
VII 自己愛的憤怒	.21*	.27**	.20*	.23**	.12	.17	

※ * $p < .05$, ** $p < .01$

※ 表の上部 = 男性, 下部 = 女性

※ I = 自己誇大感、II = 賞賛願望、III = 対人過敏、IV = 対人消極性、V = 自己萎縮感、VI = 権威的操作、VII = 自己愛的憤怒

4. 考察

4.1. 青年期の自己愛傾向における特徴と性差

青年期の自己愛傾向の程度について図1に示した。男女ともに自己誇大感よりも賞賛願望が高い水準にあることが示された。相良(2006)、中山・中谷(2006)は自己愛傾向の発達の变化を検討するため、中学生から大学生までの横断的研究を行ったが、どちらの研究も大学生の誇大性得点よりも注目欲求が高いことが示唆されており、今回の知見はこれらの先行研究と一致するものである。男性はどの因子も平均的に高く、自己の誇大性と過敏性を同時に体験している可能性がある。また、女性は過敏特性とされる対人過敏・対人消極性・自己萎縮感において他の因子の得点よりも高い水準が示されている。ここから、青年期の女性は全体として過剰警戒型自己愛人格に類似した特徴を持つと考えられる。中山・中谷(2006)は自己愛の2側面と精神的健康との関連を検討しているが、両者がともに高い水準にある混合型と、過敏特性の高い過敏型は、他の群と比較して不適応の程度が高いことが示されており、彼らが常に不適応感を抱いて生活している可能性がある。さらに、男女ともに自己愛的憤怒の水準が高い。賞賛願望の強い青年期の若者は自己が軽く扱われるということを敏感に感じ取り、怒りを感じていることが考えられる。

表4. 男女別各自己愛傾向因子の得点の特別な地位3群間の比較

男性	SP獲得 (n=17)		SP喪失 (n=20)		t値
	M	SD	M	SD	
自己誇大感	2.93	(.69)	2.58	(.41)	1.90+
賞賛願望	3.21	(.69)	3.07	(.57)	.68
自己萎縮感	2.69	(1.14)	3.08	(1.12)	-.97
対人消極性	2.43	(.82)	2.94	(.73)	-2.03*
対人過敏	2.72	(.94)	3.00	(.82)	-1.03
権威的操作	2.75	(.75)	2.78	(.72)	-.11
自己愛的憤怒	3.13	(.94)	3.36	(.83)	-.79

女性	SPなし (n=9)		SP獲得 (n=39)		SP喪失 (n=83)		F値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
自己誇大感	1.68	(.79)	2.21	(.77)	2.36	(.72)	4.91**	SPなし < SP喪失
賞賛願望	2.18	(.60)	2.67	(.77)	2.92	(.74)	3.51**	SPなし < SP喪失
自己萎縮感	4.08	(.74)	3.49	(.99)	3.30	(.85)	3.55*	SPなし > SP喪失
対人消極性	3.63	(1.04)	3.15	(.95)	3.18	(.88)	1.04	
対人過敏	4.08	(.63)	3.58	(.98)	3.34	(.80)	3.42*	SPなし > SP喪失
権威的操作	2.13	(.68)	2.50	(.85)	2.60	(.73)	1.55	
自己愛的憤怒	2.97	(.84)	3.27	(.83)	3.33	(.89)	.68	

※ +p<.10、*p<.05、**p<.01、***p<.005

※ 多重比較は Bonferroni による

表5. 青年期男性における自己誇大感の特別な地位3群間の比較

自己誇大感	SPなし (n=24)		SP獲得 (n=10)		SP喪失 (n=4)		F値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
容姿	2.52	(.52)	3.09	(.78)	2.75	(.60)	3.18+	SPなし < SP獲得

同年齢集団での立場	SPなし (n=13)		SP獲得 (n=18)		SP喪失 (n=7)		F値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
	2.37	(.53)	2.93	(.69)	2.70	(.46)	3.25+	SPなし < SP獲得

※ +p<.10

※ 多重比較は Bonferroni による

表 6. 青年期女性の特別な地位 3 群間の各自己愛傾向因子の比較

教師との関係	SP なし (n=68)		SP 獲得 (n=41)		SP 喪失 (n=22)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
自己誇大感	2.09	(.69)	2.42	(.77)	2.54	(.82)	4.25**	SP なし < SP 喪失
賞賛願望	3.76	(1.24)	4.35	(1.39)	4.56	(1.48)	3.96**	SP なし < SP 獲得
対人過敏	3.55	(.95)	3.34	(.75)	3.42	(.79)	.76	
対人消極性	3.30	(.99)	2.92	(.72)	3.44	(.88)	3.28*	SP なし > SP 獲得, SP 獲得 < SP 喪失
自己萎縮感	3.51	(.93)	3.23	(.84)	3.42	(.90)	1.24	
権威的操作	2.46	(.74)	2.60	(.82)	2.66	(.78)	.83	
自己愛的憤怒	3.22	(.84)	3.20	(.95)	3.65	(.70)	2.39+	

同年齢集団 での立場	SP なし (n=78)		SP 獲得 (n=29)		SP 喪失 (n=24)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
自己誇大感	2.20	(.72)	2.46	(.86)	2.27	(.73)	1.30	
賞賛願望	3.95	(1.30)	4.43	(1.55)	4.08	(1.31)	2.72+	SP なし < SP 獲得
対人過敏	3.55	(.92)	3.29	(.79)	3.40	(.75)	.97	
対人消極性	3.27	(.91)	3.01	(.91)	3.24	(.91)	.87	
自己萎縮感	3.56	(.90)	3.04	(.85)	3.34	(.85)	3.77*	SP なし > SP 獲得
権威的操作	2.49	(.75)	2.72	(.85)	2.45	(.73)	1.13	
自己愛的憤怒	3.22	(.81)	3.37	(1.00)	3.38	(.90)	.46	

容姿・外見	SP なし (n=88)		SP 獲得 (n=32)		SP 喪失 (n=11)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
自己誇大感	2.15	(.74)	2.67	(.71)	2.05	(.71)	6.48***	SP なし < SP 獲得, SP 獲得 > SP 喪失
賞賛願望	3.87	(1.32)	4.80	(1.28)	3.69	(1.28)	1.08	
対人過敏	3.49	(.88)	3.36	(.90)	3.55	(.66)	.35	
対人消極性	3.23	(.90)	3.01	(.99)	3.56	(.69)	1.63	
自己萎縮感	3.48	(.92)	3.17	(.90)	3.52	(.66)	1.48	
権威的操作	2.50	(.80)	2.67	(.76)	2.42	(.56)	.68	
自己愛的憤怒	3.34	(.84)	3.15	(.95)	3.20	(.89)	.64	

芸術・ その他の才能	SP なし (n=32)		SP 獲得 (n=41)		SP 喪失 (n=58)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
自己誇大感	2.07	(.84)	2.31	(.73)	2.34	(.72)	2.69+	
賞賛願望	3.73	(1.52)	4.17	(1.32)	4.22	(1.29)	1.47	
対人過敏	3.61	(.97)	3.41	(.87)	3.42	(.80)	.58	
対人消極性	3.40	(1.02)	3.05	(.82)	3.21	(.90)	7.00	
自己萎縮感	3.69	(1.02)	3.23	(.90)	3.38	(.80)	2.41+	
権威的操作	2.44	(.68)	2.53	(.88)	2.59	(.74)	.38	
自己愛的憤怒	3.19	(.83)	3.27	(.91)	3.35	(.86)	.37	

※ +p<.10、*p<.05、**p<.01、***p<.005

※ 分散分析において有意差の得られなかった学業・知的能力と身体能力についての表は除いた

※ 多重比較は Bonferroni による

青年期の自己愛は青年期の若者を取り巻く様々な心理社会的状況との相互作用の中で高まるのが指摘されている。男女ともに同じように自己愛が高まる (e.g., 大石, 1987; 大石・福田・篠置, 1987) とする研究が見られ

る一方で、その程度には男女で違いがあるとする研究も見られる (e.g., 佐方, 1986, 1987; 角田, 1998)。現在のところ、自己愛傾向の性差に関する統一した結論は出されていないが、小塩 (1998) は二者択一でない回答法を用いた研究に性差が生じていることを指摘し、その原因として社会的望ましさや性役割の影響を挙げている。本研究も5件法を用いた回答形式であったため、上記の要因から影響を受けたことが考えられる。本研究では小塩 (1998) と同様に、男性的役割に近い誇大特性に含まれる自己誇大性については男性のほうが高く、反対に過敏特性とされる自己萎縮感、対人消極性、対人過敏については男性よりも女性が高いという結果が示された。これも同様に、女性は人当たりよくあるべきであるという性役割意識が影響し、人前で自由に振舞えないという自己認識に繋がっていることが考えられる。

なお、小塩 (1998) において男女ともに望ましい性質であると考えられていた賞賛願望は、今回の研究では男性の得点の方が高いという結果になった。これは小塩 (1998) の用いた注目・賞賛願望の項目よりも、相澤 (2002) の賞賛願望の項目の方が有能感や自己主張を意識させるような内容で構成されていることが影響していると考えられる。

また、相澤 (2002) の中で自己愛的傷つきやすさ因子に含まれる権威的操作と自己愛的憤怒においては男女差が見られず、自己愛の傷つきやすさに関しては性別の影響が低い特性であることが伺われる。ただし男女別の因子間相関係数から、男性は因子によって相関関係の方向性が異なる因子が存在するが、女性は無関心型・過敏型どちらの因子とも正の相関を示していることから、自己愛の因子間の繋がりが異なる可能性が考えられる。

4.2. 自己愛の高まりと特別な地位との関連

本研究では、青年期の自己愛の高まりに関連する要因として、鍋田 (1997) の臨床的考察の一般化可能性について検討した。男性は過敏特性である対人消極性において、SP喪失群の方がSP獲得群よりも高いことが示された。また誇大特性のひとつとされる自己誇大感は、傾向差ではあるもののSP獲得群のほうがSP喪失群よりも高いことが示された。これは学童期に獲得された特別な地位が誇大特性を高め、それを喪失することによって誇大特性が低まり、かつ過敏特性が高まるという今回の仮説を部分的に支持することを示唆している。しかし、特別な地位を獲得した領域と男性の自己愛傾向得点を見ると、男性はSP獲得群がSPなし群と比較して自己誇大感が高まるという傾向が示されたのみで、その喪失と過敏特性が関連するものはなかった。ただし、今回の調査に参加した男性は、38人中33名が2領域以上の特別感を抱いており、一つの領域において特別感を喪失しても、自己愛を大きく傷つけるものとならなかった可能性が考えられる。

女性については分散分析の結果、SP喪失群の方がSPなし群と比較して、誇大特性とされる自己誇大感と賞賛願望の傾向が高く、過敏特性である対人過敏と自己萎縮感の傾向が低いことが示された。これは、誇大特性については仮説を支持することになるものの、過敏特性については仮説を支持せず、むしろ反対の結果を示すものとなった。男女で結果が異なったことから、自己愛傾向の発達過程に性差が存在することが示唆されるが、男女の自己愛人格の形成過程における性差を取り扱った研究は少ない。その中で宮下 (1991) は青年期男性において父親の支配・介入的養育態度と高い自己愛傾向との関連を、また彼らの自己愛傾向と母親の態度との関連が見られないことを示している。また女性においては母親の情緒的支持・受容的養育態度が低い自己愛傾向と、母親の情緒不安定と父親の肯定的な養育態度が高い自己愛傾向と関連している可能性が示されている。青年期の自己愛傾向に対する両親の養育態度の影響が男女で異なり、自己愛人格の形成過程における性差の存在を示唆しているが、今回の研究もそれを支持するものであると考えられる。

女性のSP喪失群の過敏特性が低いという本研究の結果から、非臨床群においては臨床群に見られるような傾向が存在しない可能性を示す一方、特別な地位を喪失することが、常に過敏特性を高める要因となるわけではないという可能性が考えられる。つまり、自己愛が傷つけられたことから自らを防衛するために、弱い自分から目をそむけ、いっそう誇大的な自己愛を増長させるという対処の可能性が考えられる。大石 (1987) のNPI日本語版の女性の因子分析の中で、女性は優越性・有能感といった感覚よりも、より漠然とした自己確信という因子が抽出されていることから、女性の誇大的な自己愛は漠然とした感覚として捉えられがちであり、そのため有能感を否定する材料が示された場合でも自己愛が調整されず、むしろ否定的な材料によって生じる不安から目を逸らす形で過敏特性が低下した可能性が考えられる。こういった人々は内的世界において自分は成功していると思

込んでいるために、その内的世界が脅威にさらされる前には治療の場に現れにくい(市橋, 1995)。今回用いた仮説は臨床現場に現れた患者をもとに作られたものであることが、仮説が支持されなかった一因であるとも考えられる。

最後に自己愛傾向の特別な地位を獲得した領域による違いについて考察する。女性において教師との関係の領域でのSP喪失群は、自己誇大感がSPなし群と比較して有意に高く、賞賛願望の得点はSP獲得群の方が、SPなし群よりも有意に高いことが示された。また同年齢集団でのSP獲得群では、SPなし群よりも賞賛願望が高いことが傾向差ながらも示された。上記の結果から、他者—教師や同年齢集団—から支持を受けて、特別な地位を獲得していたと認識することと、誇大特性の高まりには関連があることが示唆された。

さらに教師との関係でのSP獲得群は、SPなし群やSP喪失群と比較して有意に対人消極性が低く、同年齢集団のSP獲得群は、SPなし群と比較して有意に自己萎縮感が低いことが示された。教師や同年齢集団において特別な地位を獲得することは過敏特性を低めることを示唆しているが、これに加えてどのような関係の中で特別扱いを受けていたかによって、影響の現れ方が異なることが考えられる。大人に認められたと認識することによって周囲に対する積極性が高まり、同年齢集団の中で認められていると認識することは、集団の中で萎縮することなく対人関係を築けることにつながっている可能性がある。

また、容姿の領域でSP獲得群となる青年は自己誇大感のみが高く、その他の因子は有意な差が見られなかった。しかし、容姿のSP喪失群の場合にはSPなし群と同程度にまで自己誇大感が低下していることから、彼らの自己誇大感が容姿によってのみ支えられていることが伺われる。容姿は自己の努力による変化が期待しにくい領域であり、特別な地位の喪失前の彼らはある意味では自己の能力の伴わない幻想的な自己愛的世界に生きていたことが想像される。

今回の研究では男女ともに知的能力の領域で特別な地位を獲得することと自己愛との関連が示されなかった。中山・中谷(2006)は、学業の領域は、外的な評価にさらされやすく、自己評価が揺さぶられやすい可能性が指摘されているが、これは島(1981)の指摘にある、青年期においては知的能力が自己評価の対象となりにくいことと関連があると考えられる。加えて、今回の調査対象が大学の学部生であるため、多様な人生を歩む青年期の人々の中でも学習や運動といったことを比較的得意としてきた人々の中で行った調査であった。このことから、一度地位を喪失し、挫折を体験したとしてもそれを挽回するだけの実力を伴った、高い自己評価と関連のある自己愛である可能性がある。

思春期の特別な地位の喪失と自己愛傾向との関連についての仮説は、今回の調査では支持される部分は少なかった。しかし女性において教師との関係においてSP獲得群はSPなし群よりも誇大特性が高く、過敏特性が低いこと、またSP喪失群ではSPなし群よりも自己誇大感が高く、SP獲得群よりも対人消極性の得点が高いといった特徴が示された。これは鍋田(1997)にあるように、大人からの期待に応えることで自己愛を満たしてきたと考えられる彼らの適応のパターンが破綻することで、周囲の反応を気にしつつも自己誇大感を持ち続けているという過剰警戒型自己愛人格的な特徴を示す結果となったことが考えられる。

5. 研究の限界と今後の展望

本研究では、青年期の自己愛的な傾向の発達に関わる要因として学童期初期の特別な地位を得る体験と思春期での地位の喪失体験を取り上げた。多くの場合、特別な地位を得る体験は誇大的な自己愛を増加させることにつながり、中には健康的な人間関係を築く可能性のあるものも存在するが、その地位を失うことによって不適応的な変動が見られる領域や、現実的で健康的な自己愛であるとは言いがたい部分も見られる。本研究では、自己愛傾向の発達という観点からのみ個人の傾向を測定したが、自己愛という概念が健康なものから病的なものへの連続体であると考えられることから、身体的・精神的な健康の指標となるものをあわせて測定することが必要であると考えられる。今回の調査では特別な地位についての調査を行った人数が少なく、男子については分析を行う最低限度の人数しか集まらなかったため、今回の知見をそのまま一般化することは困難である。本研究で扱った特別な地位の獲得を経験する人数はもともと全体の中の少数であるため、さらに多くの集団に対して調査を実施することによって、より正確な結果が得られることが考えられる。

また本研究では、学童期・思春期の体験について回想させる方法を用いた。そのため、彼らが実際に特別な地位を獲得していたのかといった点については明確にできなかった。自己愛傾向の高い人物は、自己に関する情報に対して歪んだ認知を持つことが指摘されている (John & Robins, 1994) ため、現在の自己愛が高いことは自己の過去に対して歪んだ回想をさせる可能性がある。今後は、長期縦断的な手法や複数の情報提供者からの情報を用いることによって、実際の体験との関連を検討することが必要であると考えられる。

6. 付記

本研究は一部大正大学大学院人間学研究科に提出した2005年度修士論文の一部を再分析、改訂したものである。調査にご協力くださいました皆様、先生方に厚く御礼申し上げます。また本研究を執筆するにあたり、多くのご指導と励ましをくださいました菅原ますみ教授および貴重なご指導をくださいました清泉女学院大学人間学部文化心理学科眞榮城和美先生、ならびに臨床心理学研究室の皆様へ深く感謝いたします。

引用文献

- 相澤直樹 2002 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性. 教育心理学研究, 50, 215-224.
- アメリカ精神医学会 高橋三郎・花田耕一・藤縄昭 (訳) 1982 DSM-III 精神障害の分類と診断の手引 医学書院 (American Psychiatric Association 1980 *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-III*. Washington D.C.: American Psychiatric Association).
- 荒木志朗 2004 メンタルヘルス・パラダイムの今日の位置づけ—他人指向型を装う自己愛型人間の諸相— 全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 224, 85-88.
- Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.
- フロム E. 懸田克躬 (訳) 1959 愛するということ 紀伊國屋書店 (Fromm, E. 1956 *The Art of Loving; an enquiry into the nature of love*. New York: Harper & Row.)
- ギャバード G.O. 館哲郎 (監訳) 1997 『精神力動的精神医学—その臨床・実践 [DSM - IV 版] ③臨床篇 II 軸障害』岩崎学術出版社 (Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.)
- 市橋秀夫 1995 自己愛人格障害—特集にあたって— 精神科治療学, 10, 1205-1206.
- John, O.P., & Robins, R.W., 1994 Accuracy and bias in self-perception: individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 206-219.
- 角田豊 1998 共感性と自己愛傾向の関連 共感経験尺度改訂版 (EESR) と自己愛人格目録 (NPI) を用いて 心理臨床学研究, 16, 129-137.
- 河上純子 2006 『青年期における自己愛的傾向と対人関係の関連』大正大学大学院人間学研究科修士論文 (未公開).
- Kernberg, O.F. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Aronson
- コフォート, H. 水野信義・笠原嘉 (監訳) 1994 『自己の分析』みすず書房 (Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.)
- 生地新 2000 現代の大学生における自己愛の病理 (大学生のメンタルヘルスと心身症) 心身医学, 40 (3), 191-197.
- 小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究—自尊感情、社会的望ましさと関連— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 44, 155-163.
- 小塩真司 1998 自己愛傾向に関する一研究—性役割間との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 45, 45-53.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応、友人によるイメージ評定から見た特徴— 教育心理学研究 50, 261-270
- 小塩真司 2004 『自己愛の青年心理学』, ナカニシヤ出版.
- 町沢静夫 1998 『現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理』双葉社
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係. 教育心理学研究, 39 (4) 455-460.
- 鍋田恭孝 1997 『対人恐怖・醜形恐怖「他者を恐れ・自らを嫌悪する病い」の心理と病理』金剛出版
- 中島啓之 1998 青年期の逸脱行動と自己愛 辻井正次 (編) 『現代青年の理解の仕方—発達臨床心理学的視点から—』ナカニシヤ出版 169-180
- 中山留美子・中谷素之 2006 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.

河上 青年期の自己愛傾向の高まりに影響する要因の検討

- 岡野憲一郎 1998『恥と自己愛の精神分析－対人恐怖から差別論まで－』岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 1981『自己愛人間－現代ナルシズム論－』朝日出版社
- 大石史博 1987 ナルシズムの心理学的研究 (1) 関西学院大学人文論究, 37, 27-44.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男, 1987 自己愛的人格の基礎的研究 (1) —自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について—. 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 535.
- 大湖憲一 2003『満たされない自己愛－現代人の心理と対人葛藤』ちくま新書
- Raskin, R.N. & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Rhodewalt, F. & Morf, C.C. 1995 Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality inventory: A review and new findings. *Journal of research in personality*. 29, 1-23.
- 相良麻里 2006 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, 15 (1), 61-63.
- 島洋久 1981 青年期の身体・運動発達 津留宏 編著 教職心理学講座 3 青年心理学 第一法規
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録 (NPI) の開発－和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 63-76.
- 清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖的心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 牛島定信 1995 現代社会と自己愛型人格障害 精神科治療学, 10, 1231-1237.

(2007年12月1日受理)